

平成20年9月5日(水)

平成19年度 やまなし再発見講座&埋蔵文化財シンポ

「平成の兵どもの城づくり」

「甲府城を探る－魅力と謎・再発見－」

～出土遺物の再整理に伴う最新知見を中心に～

山梨県埋蔵文化財センター

野代 幸和

はじめに

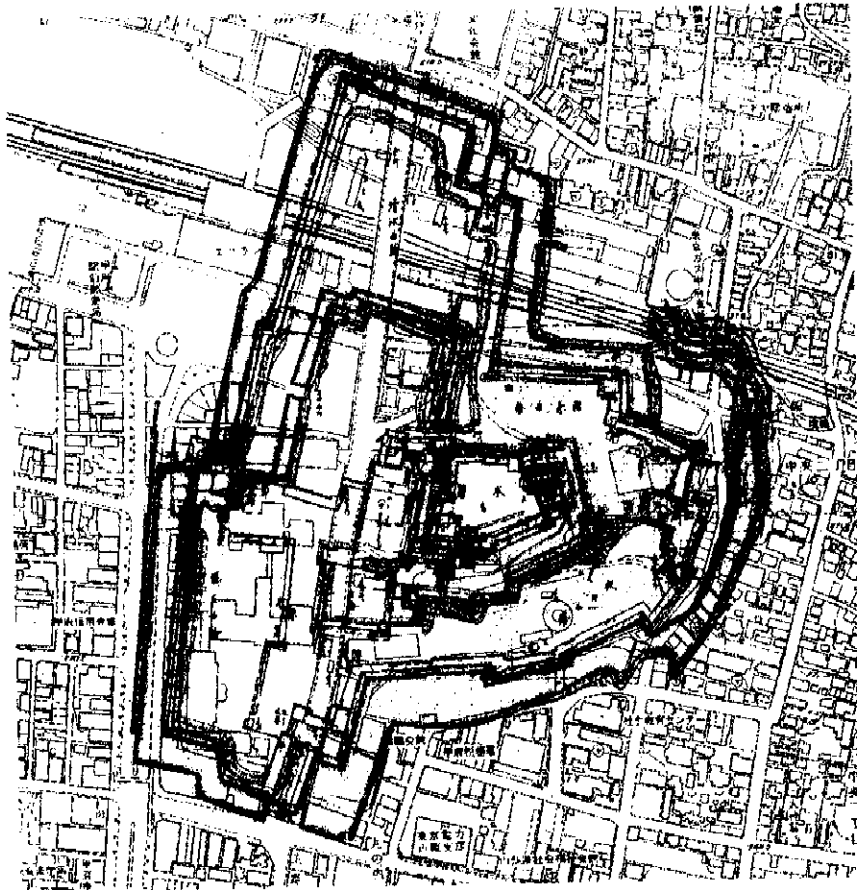
- 甲府城の歴史
- よみがえる甲府城・・・復元整備
- 甲府城の魅力再発見
- 出土遺物の再整理に伴う新知見
- 今後の課題

甲府城関係略年表

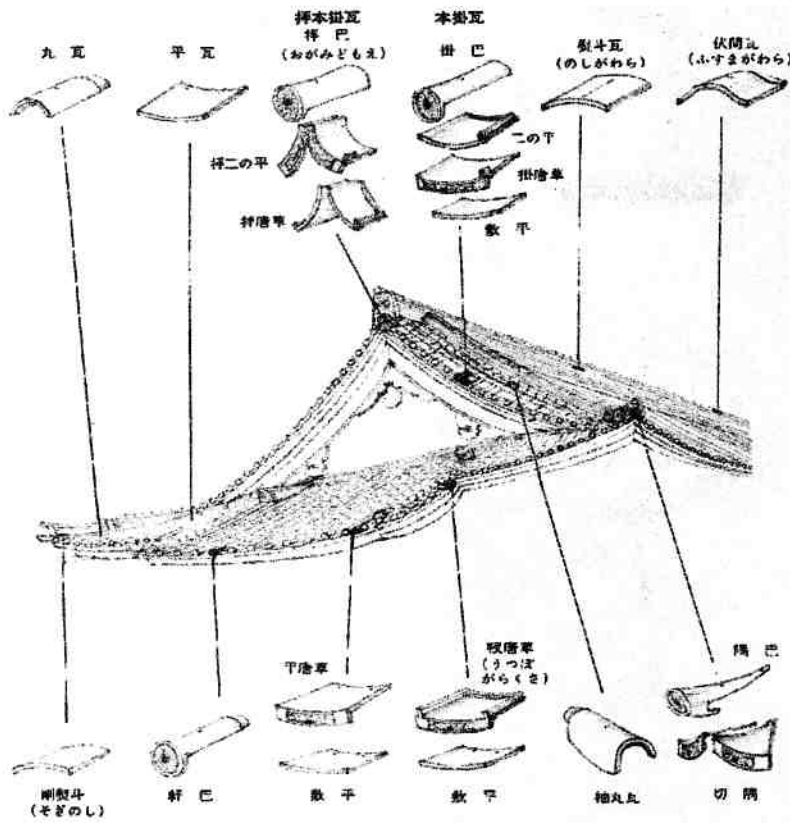
- 12世紀後半 一条忠頼、一条小山に居館を置く。
- 1312(正和元) 一条時信、館地に一蓮寺を開創。
- 1582(天正10) 武田氏滅亡。
- 1585(天正13) 家康、一条小山に新城建築を計画？
- 1590(天正18) 家康、関八州へ転封となり、代わりに秀吉の甥の羽柴秀勝入府。甲斐が豊臣領となる。翌年、秀勝が美濃岐阜城へ転封、後を加藤光泰が拝領。甲府城の築城本格化。
- 1593(文禄2) 文禄の役に参加した光泰が釜山で没し、その後を浅野長政・幸長父子が拝領。
- 1600(慶長5) 関ヶ原合戦後浅野父子が和歌山へ転封、後に平岩親吉が城代として入国。甲斐が徳川領となる。これまでに甲府城完成。
- 1704(宝永元) 大老柳沢吉保、甲斐拝領が決まる。
- 1709(宝永6) 吉保大老職を退き隠居、嫡子吉里が家督を継ぎ甲斐に在国。
- 1724(享保9) 吉里、大和郡山へ転封。徳川直轄領になり、甲府勤番制度が始まる。
- 1868(明治元) 明治維新。新政府軍入城。
- 1874(明治7) 明治政府の勅令により廃城。



甲府城下町範圍圖



都市計畫圖と旧城城



瓦の形と名称

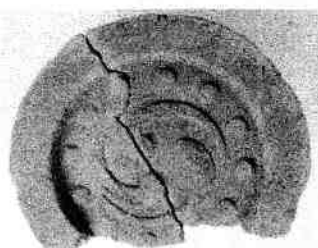
その2 軒丸・軒平瓦のなぞ

● 築城期軒丸瓦



左 巴
珠文十
(浅野?)

奇数筋は吉祥数、中世的な発想が考えられる。



右 巴
珠文十
(平岩?)



造い鷹
乃羽
(浅野)

甲府城出土鯨瓦の検討

- 世界遺産の姫路城、国宝松本城、加藤家と縁のある大洲城の鯨瓦と比較できるように並べてみました。そうしますと建物の大きさによって鯨の大きさが異なるようすがわかります。
- 人質曲輪出土のものは、推定器高は75cm程度で櫓や小天守クラスのものと同ほほ同じ大きさとなる。
- 大型鯨瓦の復元図は135cm前後の規模であった可能性が考えられ、松本城天守の鯨と同ほほ同規模。
- 同規模の建物がかつて(築城期)に存在した可能性が十分考えられます。天守台の規模では、甲府城の平面積の方がやや大きいことから肯定できる素材だと思います。ただし、天守台が築かれたものの建てられなかった福岡城、伊賀上野城、篠山城、明石城、赤穂城などもあり、絵図等が無いなど文献学的に肯定することには根拠が乏しくやや危険性を伴いますが、考古学的な見地からは、その存在を十分アピールできるだけの素材を持ち合わせていることがご理解いただけるものと思います。

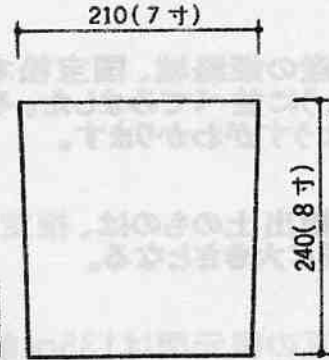
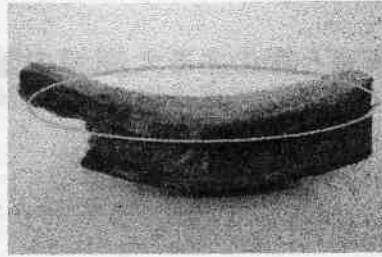
鯨瓦を技法的に見る

- 目・口・耳・胸腹の破片には、朱がよく残っており、赤い色彩が施されていた物と考えられる。
- 安土城などでは朱を混在させた赤目漆や何も混ぜない透明漆が使用された痕跡も認められている。
- 甲府城のものも大部分のパーツに朱が認められることから、朱を混在させた赤目漆を接着剤にして金箔を貼っていた可能性が十分考えられます。
- 顔面部分は黒目漆と考えられるものの付着が認められるものもあり、工法の異なるものがほほ同時期に存在する。
- 鯨の表現方法などを観察していくと長浜城跡で発見されている鯨瓦の顔面部特に目の表現方法が酷似しています。



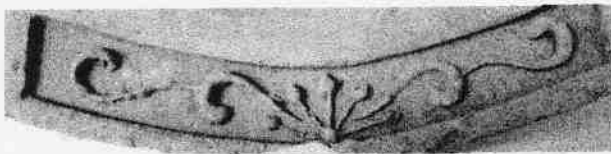
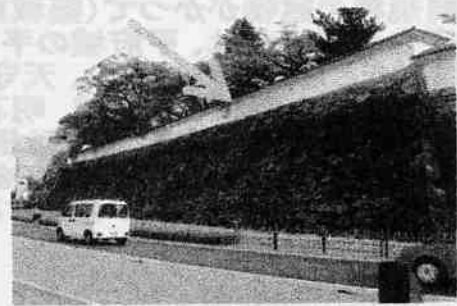
軒平瓦

分析結果

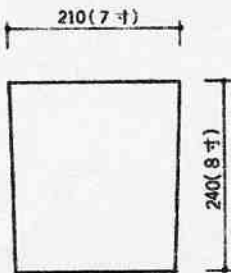


平瓦

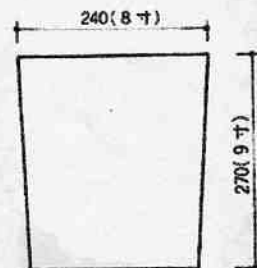
このタイプ(三葉唐草文系)のものは、巾7寸~7寸6分(小さなお寺など、に使われている可能性が高い。)のもので、いわゆる長屋物と呼ばれている小型規格が主体であるため、塀や番所等に使用された可能性が高い。全体的に軟質のものが多く、やや技術的に稚拙な感がある。頭の部分が面取りされ、反りが大きく、古い要素がある。



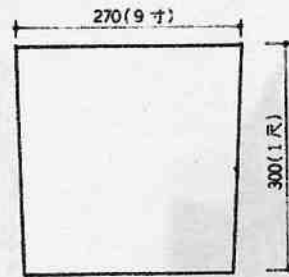
このタイプのものは、巾7寸(小さなお寺など、小型の建物に使われている可能性が高い。)の、巾8寸(桁行き15m、軒の出2mくらいまで、または屋根坪132㎡<40坪>くらいまでに使用される。大型の建物。)の、巾9寸(桁行き18m、軒の出2.5mくらいまで、または屋根坪330㎡くらいまでに使用。)の と呼ばれているものまで、すべてのサイズが出土。組織的に規格製品化された可能性が高く、各種建物に使用された可能性が高い。巾9寸ものは安土城では天守付近から出土している。面取りがあるが反りがやや緩くなる。



平瓦



平瓦

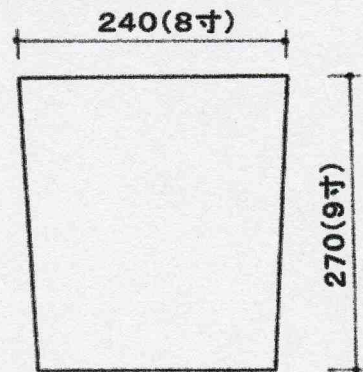
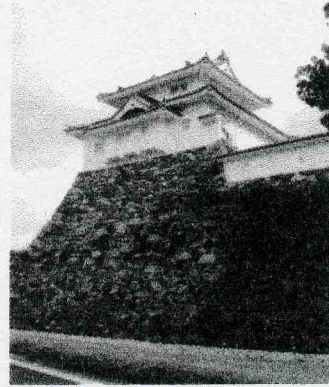


平瓦

新発見資料

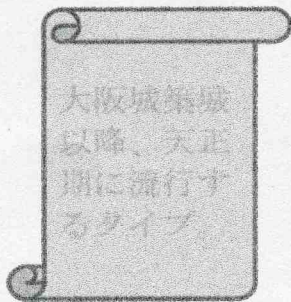


このタイプのものは、巾8寸（桁行き15m、軒の出2mくらいまで、または屋根坪132㎡<40坪>くらいまでに使用される。大型の建物。）。）の八九物と呼ばれているものに限定されるため、檜に使用と考えられる。伏見城に類似した表現のものが認められる。軟質で面取りがない。数は少ない。



滴水瓦とは

- 支那式唐草瓦、高麗瓦、朝鮮瓦などと呼ばれていた瓦当面が倒三角形の軒平瓦をいう。
- 慶長期以前では朝鮮半島製と考えられる接合角度が鈍角を有しているが、和瓦化したものは直角を呈している。
- 文禄・慶長の役に参戦渡海した大名が築いた城館に用いられるケースが多く確認されている。
- 城郭の中心部分に集中して葺かれている。金箔瓦と同様に象徴として用いられる傾向。



幅約132センチを測る

